

## 中心市街地における居場所研究 : 熊本市中心市街地のオープンスペースについて

|             |                                                                                                    |
|-------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 著者          | 鳥飼 香代子, 中山 みつこ, 森田 梨津子                                                                             |
| 雑誌名         | 熊本大学教育学部紀要 自然科学                                                                                    |
| 巻           | 51                                                                                                 |
| ページ         | 85-93                                                                                              |
| 発行年         | 2002-11-25                                                                                         |
| その他の言語のタイトル | Open Space in the Center of the City :<br>Focusing on Open Space in the Center of<br>Kumamoto City |
| URL         | <a href="http://hdl.handle.net/2298/2422">http://hdl.handle.net/2298/2422</a>                      |

# 中心市街地における居場所研究

— 熊本市中心市街地のオープンスペースについて —

鳥飼香代子・中山みつこ\*・森田梨津子\*\*

## Open Space in the Center of the City

— Focusing on Open Space in the Center of Kumamoto City —

Kayoko TORIKAI, Mitsuko NAKAYAMA, Ritsuko MORITA

(Received September 2, 2002)

When we promote reactivation of the center of the city, we need services for visitors of such as rest areas that anyone can visit freely. This paper focuses on the relation between people's behavior in the city and open spaces. The first purpose of this study is to examine the characteristics of people's behavior in the city and requirements of open space. We focus on public space and semi-public function, and how visitors use the parks.

**Key words :** open space, public space, semi-public function

### 1. 熊本市中心市街地の現状

人々にとって魅力的な街とは、商業活動や消費活動のみにとどまらず、街に一定時間滞留することそのものを楽しむことや、散策活動を楽しみながら自由に様々なスタイルで余暇時間を楽しめるといった条件を持った都市空間であろう<sup>1)</sup>。熊本の中心市街地においても、様々な人々が行き交い賑わうことで都市的魅力が形成されている。しかし、モータリゼーションの進展とそれに伴う居住地域や都市機能の郊外化により、商業立地が中心地から郊外部へ分散する傾向にあり、中心市街地の空洞化が懸念されるようになった。熊本市域は拡大を続け、市の人口は増加しているものの、中心市街地への来街者は増加しているとはいえない<sup>2)</sup>。人の動きを休日の通行量で見ると、上通り・下通りは、年々減少している。辛島公園前の通行量は、昭和60年がピークでその後、急激に減少している(図1)。また、1980年代以降、大型店の郊外立地が目立ち始め、1990年代に入ってから店舗面積10,000m<sup>2</sup>以上のものが郊外部に4店舗出店している。その結果、熊本市都心部の小売業商店販売額の県内に占めるシェアは減少している。そして、県内のみならず、近年の交通機関の発達により、人々は近接の大都市を低運賃で短時間に訪れることが可能になった。九州諸都市、特に福岡市との時間距離感に対する人々の意識も縮まっている(図2)。

このように、消費者が多様な消費行動を選択できるようになったことも、中心市街地の衰退の一因となっていると思われる。

---

\* 熊本県立大学 環境共生学部 嘱託助手

\*\* 神奈川県公立学校教諭

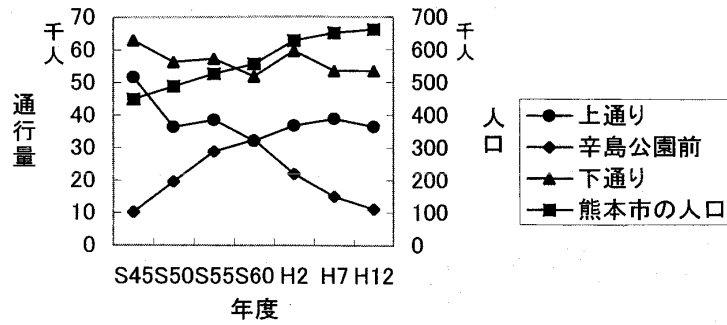


図1 熊本市の人口と休日の通行量の変化 (資料：熊本統計年鑑)

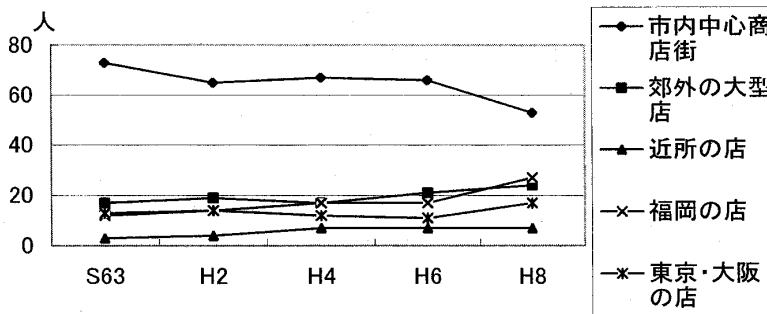
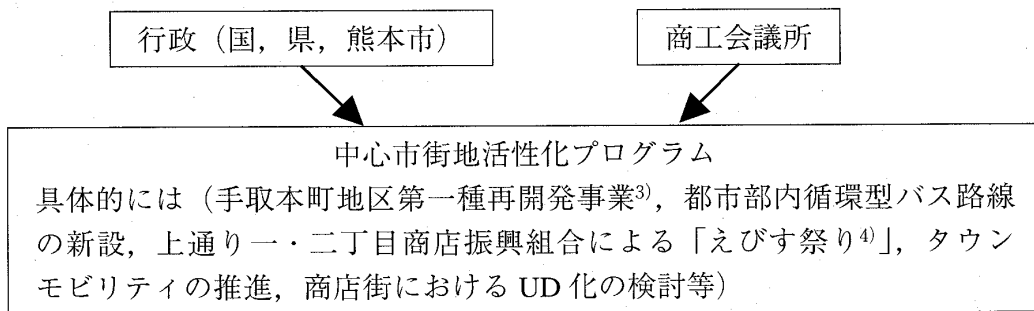


図2 商店全体が明るく活気のある場所・店 (資料：第5回エリアマーケティング調査 H.8 熊本市回答者 750名)

## 2. 中心市街地活性化へ向けての取り組み

このような中で、行政や商工会議所は様々な中心市街活性化の対策を打ち出している。



## 3. オープンスペース<sup>5)</sup>について

中心市街地活性化を来街者が自由に歩き回り、長時間にわたって滞留したくなるような空間<sup>6)</sup>とする為には、モノやサービスだけでなく、欧州に多い広場、休憩所、トイレ等の誰もが自由に訪れることのできる休息空間、つまり、都市の居場所<sup>7)</sup>が必要と考えられる。来街者へのサービスとして私達は休息空間の整備を考えている。そこで、人が行動と行動の間に休息をいれ、次の行動の起点となる場所、自由に出入りして交流が生まれる場所としてオープンスペースの機能に注目する。

#### 4. 研究の目的

本研究では、まず中心市街地（上通り・下通り）を通行している人々を対象にまち行動<sup>8)</sup>の特徴を把握し、その中から公園への要求を把握する。次に、森田の卒論「中心市街地における居場所研究—熊本市通町界隈の公園利用について—<sup>9)</sup>」で検討した公的空間である公園に加えて半公共的な機能の空間<sup>10)</sup>にも注目し、それらが日頃人々にどのように使われているのか、問題点は何かを利用者への調査をもとに検討する。これらの調査を通して、中心市街地の中でオープンスペースへの提言をし、もって中心市街地活性化へと結び付けたい。

#### 5. 研究の方法

まず、来街者へ中心市街地にある通りから300m範囲内の9つの公園<sup>11)12)</sup>・広場についての存在意義、利用状況を把握するためにヒアリング調査を行う。調査対象は通町周辺の来街者（有効調査人数97名）。内容は、9つの公園広場をそれぞれについて、行く理由と、行かない理由を尋ねる。そして、まち行動の実態を知る手がかりとして、どのような場所を休憩場所として利用しているかも質問項目とした。

調査公園は、①白川公園（上通りから270m）、②蓮政寺公園（下通りから140m）、③スペース21（下通り）、④辛島公園（新市街から30m）、⑤高橋公園（上通りから250m）、⑥花畑公園（新市街から150m、下通りから270m）、⑦千葉城公園（上通りから160m）、⑧上林公園（並木坂から170m）、⑨西岸寺公園（シャワー通りから60m）である。調査期間は、2001年10月14日～16日である。

次に、認知度、利用頻度の高い4つの公園・広場については、平日・休日別に利用実態調査を行う。利用実態調査の対象は、公園に積極的な関わりをもつ利用者である（有効調査人数292名）。公園がどれくらい、どのような人々に利用されているかを把握するために、また、来街と公園の関係性を探るために行った。利用者の意識調査は実態調査のもとで、どのような目的で来訪しているかを知るため、利用者から見た公園の現況をヒアリング調査により求めた。内容は、来街と来園の目的・頻度・交通手段、施設や景観への希望・不満の有無、性別、年齢、職業、職場・自宅の住所である。観察項目としては、滞在場所、飲食物・タバコの有無、来園人数を設けた。調査期間は、2001年11月4日、7日、9日、11日である。また、公園・広場の一日の利用状況を把握するために、午前10時から午後5時までの30分毎に、利用者数を数え公園配置図にプロットしていく。

対象公園の選択は、視察調査と通りから300m範囲内に立地する9つの公園に対するヒアリング調査の結果のほか、次の点に留意した。整備済みで景観上完成している。利用者が比較的多く、性別や年齢層が幅広い。対象公園の周辺地域に特徴・性格に差がある。対象地域に阻害要因（大幅員道路・電車軌道）がある。

以上の点を考慮し、白川公園（近隣公園）と蓮政寺公園（街区公園）とスペース21（個人所有のオープンスペース）と辛島公園（特殊公園）を選択した。

## 6. 結果及び考察

### 6-1. 来街者のまち行動の特徴

#### ①年齢層別

平日は、10代20代の割合が約45%なのに対して、休日では約75%にも上る。その分30代以上の休日に占める割合が減少している（図3）。

#### ②来街の目的

平日は、仕事での来街が全体の40%近くを占める。次に多い目的としては買い物である。反対に休日は、買い物での来街が40%以上である。次にレジャー、仕事と続く（図4）。

#### ③来街者の自宅の住所

平日・休日ともに市内を自宅とする者の来街が多い。休日になると、県内郡部と県外からの来街が増加する（図5）。

#### ④街の滞留時間

仕事での来街ではそのほとんどが4～5時間以上街で滞留する。しかし、街に長時間滞留していても、仕事場にいる時間が長く、まち行動をする時間の確保は少ない。仕事で来た場合はまち行動は難しいと考えられる。買い物を目的として来街する場合は、データーからは街の滞留時間は4時間が限界だと考えられる。2～4時間街に滞留する場合には休憩を1度、5時間以上の滞留になると朝、昼、夜いずれかの食事をとると考えられる（図6）。

買い物などのまち行動をする際に来街者が無料で休憩できる場所を保障することで、街の滞留時間が長くなりこのことがひいては、街が活気づく要因になると考えられる。したがって、街の滞留時間を長くする休憩場所の確保が重要である。

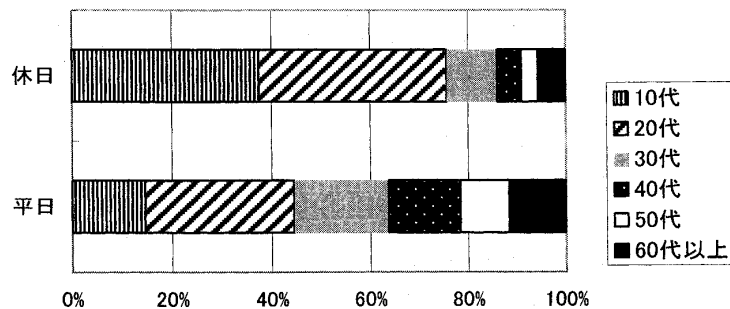


図3 来街者の年齢層（休日・平日別）

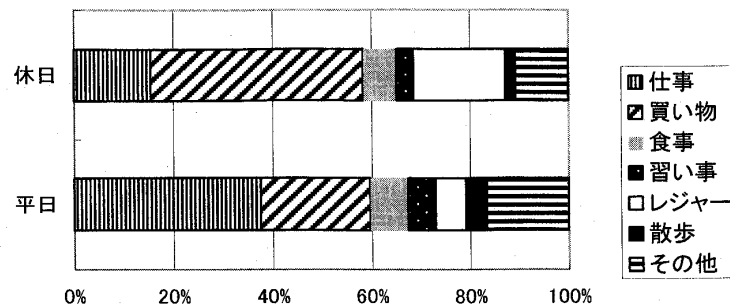


図4 来街者の目的（休日・平日別）

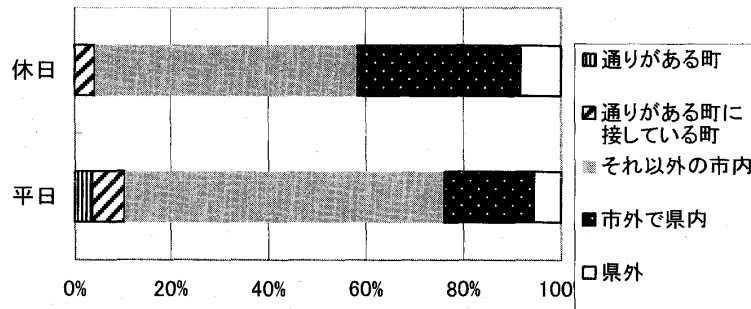


図5 来街者の居住地 (休日・平日別)

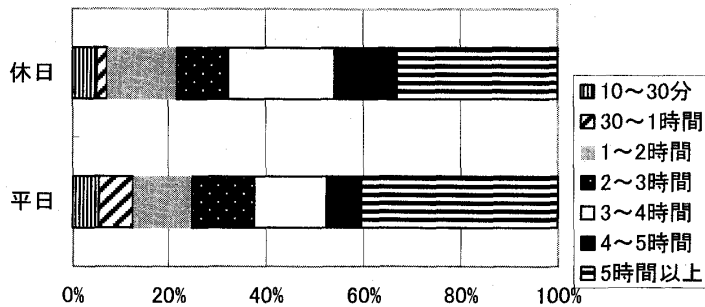


図6 街の滞留時間 (休日・平日別)

6-2. 調査対象公園の特徴と立地上の問題点

白川公園 (写真1)

通りと国道3号線で分断されるためにまち行動の休憩のために立ち寄るには遠いと感じられ、公園でのレジャーや行くことそのものが目的となることが多かった。白川公園への交通手段としては自転車が多く、散歩で毎日立ち寄ると回答する人が多かったことから、近隣に住む人が利用していることがわかる (図7)。

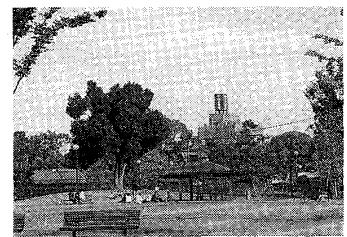


写真1 白川公園

蓮政寺公園 (写真2)

通りで仕事をしている人の割合が、この公園だけが半数を超えている。これは、近接して百貨店があることと、通りから路地でつながっていることが理由に挙げられる。

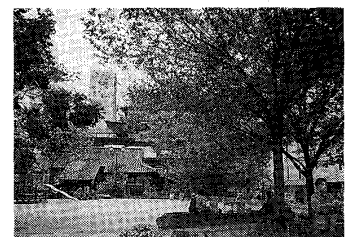


写真2 蓮政寺公園

平日の蓮政寺公園は、近隣で働く人が、思い思いに10分~1時間以内の休憩をとる場としての活用度が大きい。休日は、家族連れや、友人同士など、出入りが頻繁である。通りからあるいは通り周辺の職場から移動するのに、路地の役割が大きいことがわかる。また、立体駐車場と、百貨店の搬入口が近接しているために、より騒音が高くなる (図8)。

辛島公園 (写真3)

蓮政寺公園と比較すると、通りからの距離は変わらないが、大きな交差点で通りと分断されている。また、周囲の準幹線道路が国道3号線と国道266号線に接続し、交通量が多い。これらの原因のために、市民の日常的な生活の場とはかけ離れていると考えられる。

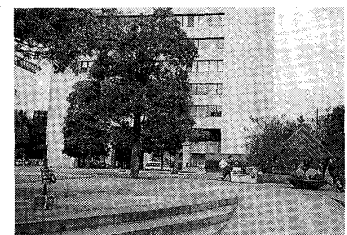


写真3 辛島公園

また、辛島公園は通り抜けに利用する人が多いことがわかっている。積極的な公園の利用の仕方はいえないが、地下駐車場・駐輪場があり、利用者がそのまま公園に上がると考えられることと、周囲の道路の交通量が多く、騒音や、排気ガスで歩道を安心して歩けないことが関係していると考えられる。

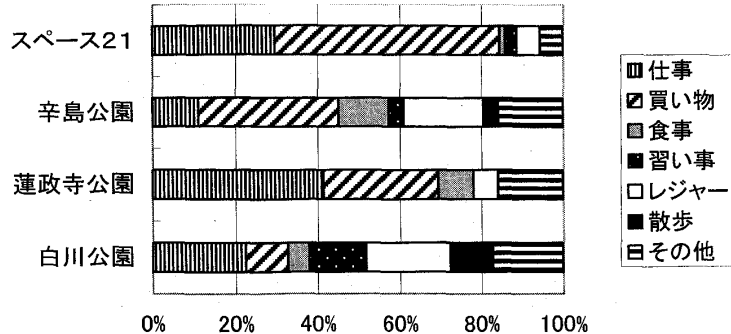


図7 来街の目的 (公園別)

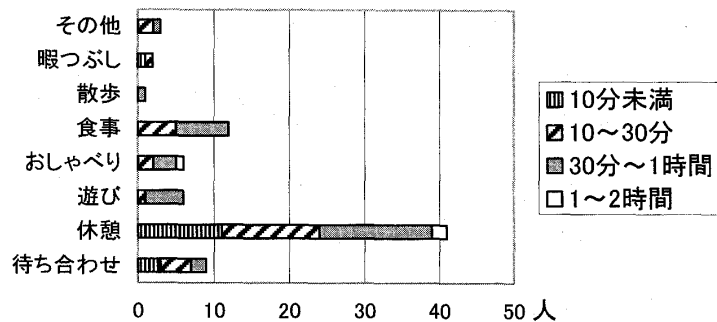


図8 来街の目的と公園の滞在時間 (蓮政寺公園)

### 6-3. 公園施設<sup>13)</sup> 及び周辺環境上の問題点

#### ベンチ

設置要求が高かった。公園における滞在場所をみると、大半の人が休憩場所をベンチとしている。不足したときに代用するものとして、白川公園では芝生、蓮政寺公園では通路の段差、辛島公園では階段・スロープが挙げられる。

#### 自動販売機・飲食店

自動販売機は設置要求が高かったが、飲食店は必要ないとする人が多かった。

#### きれいな空気

空気の悪さが利用者から指摘されている。排気ガスが主な原因で、中心市街地内の交通量が多いことと、公園周辺に駐車場が多いことが関係している。

#### 騒音

くつろぐことのできない理由として騒音に対する不満が多く挙げられた。これは、公園のみの問題だけでなく中心市街地全体の問題ともいえる。白川公園、蓮政寺公園、辛島公園の騒音の原因は自動車交通によるものである。これらを避けることが望ましいが、騒音を吸収する植栽などの公園緑化で一定の改善を図ることができる<sup>14)</sup> (図9, 10)。

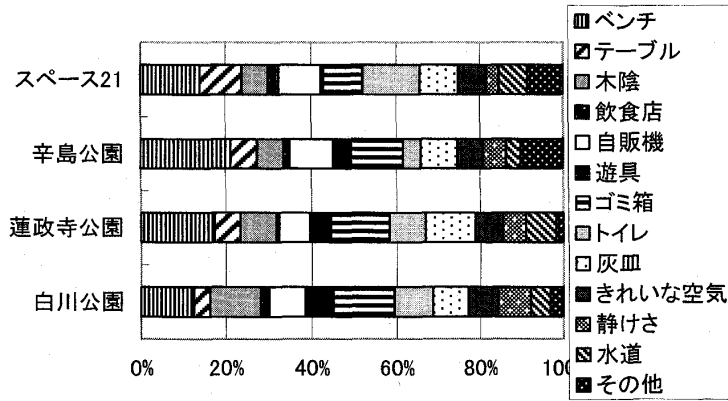


図9 公園に必要なもの

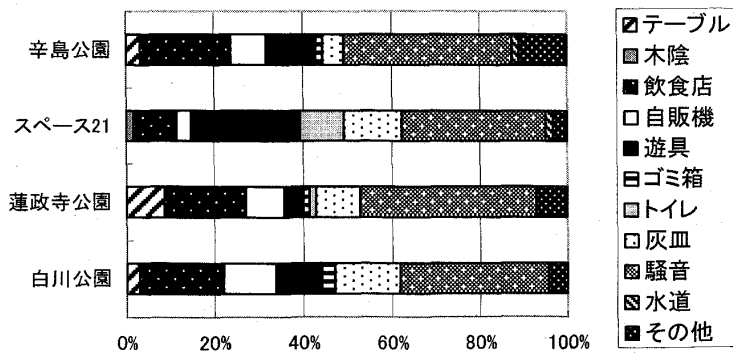


図10 公園に必要ないもの

6-4. 中心市街地における半公共的空間の特徴と問題点

来街者と公園利用者への調査結果及び観察調査の結果から、中心市街地における半公共的空間の検討を行う<sup>15)</sup>。

①スペース 21 (写真 4)

滞在時間が30分未満の利用者が80%を超える。どの年齢層でも休憩を目的とした使い方が最も多い。平日、休日ともに、まち行動の際の、短時間の休憩に頻繁に利用される。また、休日は、市外からの来街者の初めての来訪がきわめて高い。通りに面していてわかりやすいため知らない人でも、目に付き易く、行き易い場所であることがわかる(図11)。

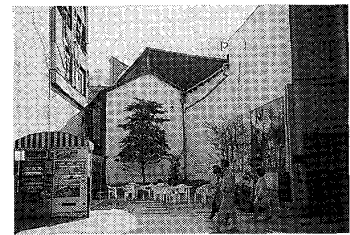


写真4 スペース 21

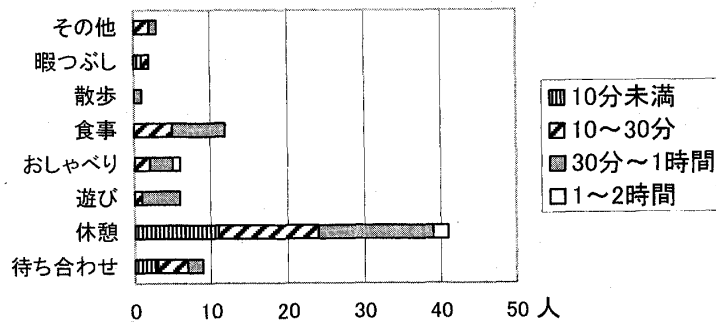


図11 来園の目的と滞留時間 (スペース 21)



## ② WING 館前

建物出入り口の植え込みに座ることができる。通りに近く、待ち合わせによく利用される空間である。屋根があるので雨天でも利用されている。百貨店・その他の商業ビルの出入り口に面しているために人通りが大変多い場所である。駐車場が近接し、通町筋へ向けて常に車が流れているために座ったときに見える範囲の交通量が多いことが問題点である。

## ③ 熊本市役所前

ベンチがあり、市役所に訪れる人やバス停・電停に近いために人通りが多い場所でもある。しかし、利用している人が少ないのは、幹線道路に面していて、空気の悪さと騒音が気になるためであると考えられる。

## ④ 九州郵政局前

円形のベンチが2つ、木陰もあるが、市役所前と同様に利用している人が少ないのは、幹線道路に面していて、空気の悪さと騒音が気になるためであると考えられる。

## ⑤ 長堀通り

坪井川に沿って、ベンチが数箇所設けられている。建物に背を向けるようにして座るようになっている。建物と歩道が自動車交通による騒音を遮るために幹線道路に近い割には静かな空間となっており、休憩などに利用される。しかし、幹線道路を渡らなくてはいけないために、まち行動の途中で立ち寄るには遠いと感じられる。

## ⑥ シャワー通り

ベンチと日よけ付のテーブルが各商店の前に設けられ、飲食・休憩によく利用されている。通りそのものに設置されているために、利用が多いと考えられる。管理は各商店である。この場所も、すぐ前を車が行き交うことが問題点として挙げられる。

## 7. ま と め

以上の問題点の検討を通して、来街者がオープンスペースに求めるものとしては、広さや施設の内容よりも、立地条件によるものが大きいことがわかった。通りから近距離にあり、行き易く、居心地のよい空間の需要が高い。

また、まち行動に伴う公園利用の特徴を年齢層で見ると徒歩での移動を前提としたまち行動では年齢の高い層ほど疲れやすく休憩の必要性は高いと考えられるが、公園利用は10代20代に比べると40代、50代は少ない。30代はおしゃべりや食事などの目的で利用する人もいるが、40代以上は皆無である。この一因に広場の雰囲気や周辺環境との関係が考えられる<sup>16)</sup>。このことは公園が中・高年層のまち行動における休憩場所となっていないことを意味している。中・高年層の積極的な外出を誘導するような、使いやすい公園づくりの必要性が指摘できる<sup>17)</sup>。また、高齢者は公園に長時間滞在していない。中心市街地において高齢者がいきいきと活動するためにも、通り周辺の休憩所の役割を見直し、高齢者の市街地での居場所を確保していかなければならない。

本研究をもとに、中心市街地におけるオープンスペースに対して、次のような提言をしたい。公園に関しては行き易さを確保するために通町とのつながりを強めること（例えば複数のスクランブル交差点確保、車道の一部の歩道化<sup>18)</sup>）、公園内に設置要求の高いベンチなどの設置を進めることである。半公共的空間に関しては、通町から近距離にあるという立地を活かすためには通りとのつながりをさらに強めるように歩行空間を広げる内容で周辺道路の活用を考えること（歩行者天国やトランジットモール整備など）、ベンチなどの設置を進めることが重要である。これ

らの提言は極めて限られた範囲のものであり、今後、利用者、来街者など住民、行政、商店及び企業などの幅広い参加と支援の下で議論を広めていくことが重要である。

## 謝 辞

最後に、調査活動の手助けをしてくださった同研究室の岡村聡広さん、上田記子さん、田添理子さん、調査を行うにあたり、快くアンケート調査に協力していただきました対象者の皆様に心より感謝いたします。

## 注及び参考文献・資料

- 1) 緒方誠人 材野博司, 都市のサイン計画に関する行動面からの研究 — 歩行者のサイン・空間情報のための行動に関する研究 —, 日本建築学会計画系論文報告集 No.473, p113 ~ 119, 1995.7
- 2) 統計 KUMAMOTO No21, 熊本市総務局情報企画部統計課, 2001.3
- 3) 熊本市中心市街地活性化基本計画, 熊本市, 1999.3
- 4) 上通り並木坂憲章, 上通り一番街商店街振興組合, 上通り1・2丁目商店街振興組合, 1990 制定・1998.12 改訂
- 5) 建物が建っていない非建ペイ地で交通用地(道路, 鉄道敷等)でない土地.
- 6) 渡辺光雄, 地域計画における公共施設の設置計画に関する研究「S.B.現象」について その2, 日本建築学会計画系論文報告集 No.334, p148 ~ 157, 1983.12
- 7) 自由に過ごすことのできる空間.
- 8) 買い物を含んで街を回遊しながら自由に楽しむ行動.
- 9) 森田梨津子, 中心市街地における居場所研究 — 通町界隈の公園利用について —, 2002.3
- 10) J.ゲール, 北原理雄訳, 屋外空間の生活とデザイン, p157 ~ 222, 1990.3, 鹿島出版会
- 11) 都市公園法施行令
- 12) 熊本市の都市公園, 熊本市都市整備局公園緑地部公園管理課, 2000.4
- 13) 都市公園等整備緊急措置法及び都市公園法の一部を改正する法律の施行について, 建設省都市局長通達, 1975.10.21
- 14) 関西女性造園協会編, グリーンネットワークシティ, p198 ~ 217, 1994.12, 学芸出版
- 15) 近江隆 北原啓司, Small-Urban-Spaces 内外の行為からみたSUS領域の形成, 日本建築学会計画系論文報告集 No.433, p119 ~ 127, 1992.3
- 16) 池上洋通, 人間の顔をしたまちをどうつくるか, p265 ~ 306, 1998.8, 自治体研究社
- 17) 田中直人, 福祉のまちづくりデザイン — 阪神大震災からの検証 —, p99 ~ 110, 1996.8, 学芸出版社
- 18) 宗田好史, にぎわいを呼ぶイタリアのまちづくり — 歴史的景観の再生と商業政策 —, p169 ~ 228, 2000.1 学芸出版社